

Representations of a solvable Lie group
 on \bar{a}_b cohomology spaces

京大理 野村隆昭 (Takaaki NOMURA)

§1. \mathfrak{g} を有限次元の実リ-代数, $j \in \mathfrak{g}$ 上の実線型作用素で $j^2 = -I_{\mathfrak{g}}$ をみたすもの, そして $\omega \in \mathfrak{g}^*$ (i.e. ω は \mathfrak{g} 上の一次形式) とする. 次の (i) ~ (iii) がみたさるとき, 3-組 $(\mathfrak{g}, j, \omega)$ を *normal j -algebra* とする.

(i) \mathfrak{g} は完全可解

(ii) $j \in \mathfrak{g}_{\mathbb{C}}$ 上の複素線型作用素に拡張し, $\mathfrak{g}^- \subset \mathfrak{g}_{\mathbb{C}}$ における j の固有値 $-\sqrt{-1}$ に対応する固有空間とすると, \mathfrak{g}^- は $\mathfrak{g}_{\mathbb{C}}$ の部分代数

$$(iii) \quad \begin{cases} \omega([jx, jy]) = \omega([x, y]) & \forall x, y \in \mathfrak{g} \\ \omega([x, jx]) > 0 & \forall x \in \mathfrak{g} \setminus \{0\} \end{cases}$$

さて, $(\mathfrak{g}, j, \omega) \in \text{normal } j\text{-algebra}$ とし, $G = \exp \mathfrak{g}$ を \mathfrak{g} のリ-代数に属する連結かつ単連結なリ-群とする. \mathfrak{g} の基本的構造についてはよく知られている. 本稿では Rossi and Vergne [7, Theorem 4.3] に従って, 次の定理 1 にまとめよう. まず, 実ベクトル空間 \mathfrak{g} は内積 $\langle x, y \rangle = \omega([x, jy])$

と持ち、 \mathfrak{g} はこの内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle$ 上の直交変換になつてゐることに注意する。また、 \mathfrak{g} を j によつて複素ベクトル空間と見たもの \mathfrak{g} を $\mathfrak{g}(j)$ と表すと、 $\mathfrak{g}(j)$ はエルミート内積

$$(1) \quad (x, y) = \omega([x, jy]) - i\omega([x, y])$$

と持ち、 $\forall x, y, \langle x, y \rangle = \operatorname{Re}(x, y)$ である。

定理1 (Pyatetskii-Shapiro [6]).

(i) $\mathfrak{r}' = [\mathfrak{g}, \mathfrak{g}]$ とし、 $\sigma \in \mathfrak{g}$ における $\langle \cdot, \cdot \rangle$ にかんする \mathfrak{r}' の直交補空間とする。このとき、 σ は \mathfrak{g} の可換部分代数 $\mathfrak{g} = \sigma + \mathfrak{r}'$ であり、 \mathfrak{g} の随伴表現の制限を定義される σ の \mathfrak{r}' への表現は completely reducible である：

$$\mathfrak{r}'_{\alpha} = \{x \in \mathfrak{g}; [H, x] = \alpha(H)x \quad \forall H \in \sigma\} \quad (\alpha \in \sigma^* \setminus \{0\})$$

とおくと $\mathfrak{r}' = \sum^{\oplus} \mathfrak{r}'_{\alpha}$ 。そしてこの分解は $\langle \cdot, \cdot \rangle$ に関する直交分解である*。

(ii) $0 \neq j\mathfrak{r}'_{\alpha} \subset \sigma$ となる $\alpha \in \sigma^* \setminus \{0\}$ の全体を $\alpha_1, \dots, \alpha_l$ とすると、 $l = \dim \sigma$, $\dim \mathfrak{r}'_{\alpha_k} = 1$ ($1 \leq k \leq l$) であり、必要ならば番号を適当に付け変えると $\mathfrak{r}'_{\alpha} \neq \{0\}$ となる $\alpha \in \sigma^* \setminus \{0\}$ は次の形 (ただし、すべての possibilities が起こるとは限らない)。

$$\frac{1}{2}(\alpha_k + \alpha_m) \quad (1 \leq m < k \leq l), \quad \frac{1}{2}(\alpha_k - \alpha_m) \quad (1 \leq m < k \leq l)$$

$$\frac{1}{2}\alpha_k \quad (1 \leq k \leq l), \quad \alpha_k \quad (1 \leq k \leq l)$$

$l = \dim \sigma$ のことを \mathfrak{g} の階数と呼び $\operatorname{rank} \mathfrak{g}$ と表す。

*以後この \mathfrak{r}' は理れたい。

$$(iii) \quad \mathfrak{g}(0) = \mathfrak{a} + \sum_{k>m} \mathfrak{r}_{(\alpha_k - \alpha_m)/2}, \quad \mathfrak{g}(1/2) = \sum_{i=1}^l \mathfrak{r}_{\alpha_i/2},$$

$$\mathfrak{g}(1) = \sum_{k>m} \mathfrak{r}_{(\alpha_k + \alpha_m)/2}$$

とおくと, $[\mathfrak{g}(k), \mathfrak{g}(m)] \subset \mathfrak{g}(k+m)$ が成り立つ. そして

$$j \mathfrak{r}_{(\alpha_k - \alpha_m)/2} = \mathfrak{r}_{(\alpha_k + \alpha_m)/2} \quad (k > m), \quad j \mathfrak{r}_{\alpha_m/2} = \mathfrak{r}_{\alpha_m/2} \quad (1 \leq m \leq l)$$

(iv) $u_i \in \mathfrak{r}_{\alpha_i} \quad (1 \leq i \leq l)$ $\exists [j u_i, u_i] = u_i$ と選ぶと $\alpha_k(j u_i) = \delta_{ki}$ となる. $\mathfrak{s} = \sum_{i=1}^l u_i$ とおくと, $\mathfrak{g}(k)$ は $\text{ad } \mathfrak{s}$ の k -固有空間.

以下 \mathfrak{g} の部分空間上の Lebesgue 測度はすべて内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle$ に關して正規化されたものであるものとする. $G(0) = \exp \mathfrak{g}(0)$, $G(1) = \exp \mathfrak{g}(1)$ とそれぞれ $\mathfrak{g}(0)$, $\mathfrak{g}(1)$ に対応する G の連結部分群とする. また, $N = \exp(\mathfrak{g}(1/2) + \mathfrak{g}(1))$ は G の高々 2-step な連結バネ零部分群である. そして G は $G = N \rtimes G(0)$ と半直積で表される. さて我々の問題を述べる前に次の誘導表現 T の既約分解を考慮してみよう: $T = \text{Ind}_{G(0)}^G \mathbb{1}$ ($\mathbb{1}$ は $G(0)$ の trivial 1次元表現). $G/G(0)$ と N とは微分同型であるから, T は $L^2(N)$ 上に実現できる (N は単連結バネ零リ一群故, N の Haar 測度は $\mathfrak{n} = \text{Lie } N$ 上の Lebesgue 測度):

$$(2) \quad T(g_0) f(n) = \delta(g_0)^{1/2} f(g_0^{-1} n g_0), \quad \delta(g_0) = (\det_{\mathfrak{n}} \text{Ad } g_0)^{-1}, \quad (g_0 \in G(0))$$

$$T(n_0) f(n) = f(n_0^{-1} n) \quad (n_0 \in N)$$

さて, 定理 1(iii) から $G(0)$ は $\mathfrak{g}(1)$ に G の随伴表現の制限を作用する. 従って $G(0)$ は $\mathfrak{g}(1)^*$ にその反値表現を作用する. こ

の作用での開軌道については次の事実が知られている。

命題 1 (cf. Rossi et Vergne [8, Proposition 3.3.1]).

$\mathcal{X} = \{-1, 1\}^l$ ($l = \text{rank } \mathfrak{g}$) とおく。 u_i ($1 \leq i \leq l$) を定理 1(iv) の如くとし、 $u_i^* \in \mathfrak{g}(1)^*$ を $u_i^*(u_k) = \delta_{ik}$ ($1 \leq k \leq l$)、 $u_i^*|_{\pi(u_k + d_m)/2} = 0$ ($k > m$) と定義する。 各 $\eta = (\eta_1, \dots, \eta_l) \in \mathcal{X}$ に対して、 $\lambda_\eta = \sum_{i=1}^l \eta_i u_i^* \in \mathfrak{g}(1)^*$ とおくと、 $\{\lambda_\eta\}_{\eta \in \mathcal{X}}$ は $\mathfrak{g}(1)^*$ における $G(0)$ の開軌道の完全代表系となし、 $\mathfrak{g}(1)^*$ の開集合となる軌道の次元は $\dim \mathfrak{g}(1)^*$ より真に小さい。 以下 $O_\eta = G(0) \cdot \lambda_\eta$ とおく

G の \mathfrak{g}^* への余随伴表現による作用での開軌道については次の通り。

命題 2. \mathfrak{g}^* における G の開余随伴軌道も $\mathcal{X} = \{-1, 1\}^l$ をパラメータと見做し、 $\mathfrak{g}(1)^* \supset O_\eta \mapsto O_\eta \cong \mathfrak{g}(0)^* + \mathfrak{g}(1/2)^* + O_\eta \subset \mathfrak{g}^*$ なる一対一対応がある。

以下 $\rho: \mathfrak{g}^*/G \rightarrow \hat{G}$ を Kirillov-Bernat 対応とする。 さて、 $\mathfrak{g}(1/2) = \{0\}$ とすると (この仮定は、 normal \mathfrak{j} -algebra $(\mathfrak{g}, \mathfrak{j}, \omega)$ に対応する Siegel 領域が tube 領域になることと同

値), $T = \text{Ind}_{G(0)}^G \mathbb{1}$ は次の様にきれいに分解される:

$$(3) \quad T \cong \bigoplus_{\eta \in \mathbb{R}} \rho(\mathcal{O}_\eta)$$

証明は (1) と (1)* の duality による (euclidean) Fourier 変換を用いると容易. 分解 (3) が互いに同値でない既約 \mathbb{Z} -タリ表現の重複度 1 の和になっていることに注意. そして $\rho(\mathcal{O}_\eta)$ ($\eta \in \mathbb{R}$) 達は G の Plancherel 公式が書き下せることにも注意しておく.

一般に $\mathcal{O}(\frac{1}{2}) \neq \{0\}$ とすると, 今度は $T \cong \bigoplus_{\eta \in \mathbb{R}} \infty \rho(\mathcal{O}_\eta)$ となり, 各表現が無限の重複度を持って現れる. これは一つには $G(0)$ が G に比べて小さすぎるということが原因である ($T|_N$ は N の左正則表現であることに注意). 表現論的には T の部分表現 $T_0 \cong \bigoplus_{\eta \in \mathbb{R}} \rho(\mathcal{O}_\eta)$ となるものは如何様にもとり出せるが, 本稿では重複度を "削る" と, $\bigoplus_{\eta \in \mathbb{R}} \rho(\mathcal{O}_\eta)$ となる表現と, 幾何学的な対象と関連づけて produce するのが目的である. 以下, 一つは $\mathcal{O}(\frac{1}{2}) \neq \{0\}$ と仮定する. まず Rossi et Vergne [8, Théorème 3.5.11] による 1 つの結果を述べよう. そのために幾つかの準備が必要である.

簡単のため, $V = \mathcal{O}(\frac{1}{2})$ とおく. V は \mathfrak{g} で不変である (定理 1(iii)) から, $\mathfrak{g}|_V$ を V 上複素ベクトル空間とみなせて, (V, \mathfrak{g}) を表す. V^\pm を $V_{\mathbb{C}}$ における \mathfrak{g} の固有値 $\pm\sqrt{-1}$ に対応する固有空間とする*. N のリー代数の複素化 $\mathfrak{g}_{\mathbb{C}}$ の元と N 上の

* V^\pm は $\mathfrak{g}_{\mathbb{C}}$ の可換部分代数になる.

左不変な微分作用素とみなして, $L_{CR}^2(N)$ と

$$\{f \in C^\infty(N) : Xf = 0 \quad \forall X \in \mathfrak{V}^-\} \cap L^2(N)$$

の $L^2(N)$ における閉包とすると, $L_{CR}^2(N)$ は (2) で定義された G の \mathfrak{U} -タリ表現 T で不変である. 一方

$$(4) \quad Q(x, y) = \frac{1}{4} ([jx, y] + i[x, y]) \quad (x, y \in \mathfrak{V})$$

とおくと, Q は $(\mathfrak{V}, j) \times (\mathfrak{V}, j)$ から $\mathfrak{U}(\mathfrak{I})_{\mathbb{C}} \wedge$ の hermitian sesquilinear map である. $n = \dim_{\mathbb{C}}(\mathfrak{V}, j)$ とし, $\mathfrak{U}(\mathfrak{I})$ 上の一次形式の集合 Ξ , Ξ_p ($1 \leq p \leq n$) を次で定義する.

$$(5) \quad \begin{aligned} \Xi &= \{ \lambda \in \mathfrak{U}(\mathfrak{I})^* ; \lambda \circ Q \text{ は非退化} \} \\ \Xi_p &= \{ \lambda \in \Xi ; \lambda \circ Q \text{ の負の固有値は } p \text{ 個, 正の固有値は } \\ &\quad n-p \text{ 個} \}. \end{aligned}$$

$(\mathfrak{U}, j, \omega)$ が normal j -algebra であることから, $\omega \in \Xi_n$ 従って $\Xi_n \neq \emptyset$ である. Ξ_n は $G(\mathfrak{I})$ -不変な閉集合であり, Ξ_n に含まれる閉 $G(\mathfrak{I})$ -軌道 Ξ 全部とってそれらを $O_{\eta(1)}, \dots, O_{\eta(k)}$ ($\eta(m) \in \mathfrak{X}$, $m=1, \dots, k$) とすると, $\overline{\Xi_n} = \bigcup_{m=1}^k \overline{O_{\eta(m)}}$ (バーは閉包) である. $O_{\eta(1)}, \dots, O_{\eta(k)}$ は命題 2 で得られる \mathfrak{U}^* の閉余随伴軌道とする.

定理 2 (Rossi et Vergne). $T|_{L_{CR}^2(N)} \cong \bigoplus_{m=1}^k \mathcal{P}(O_{\eta(m)})$

注意 $\mathfrak{f} = \mathfrak{U}(\mathfrak{I})_{\mathbb{C}} + \mathfrak{V}^-$ とおくと, \mathfrak{f} は $\mathfrak{U}_{\mathbb{C}}$ の部分代数である

り, $\omega \in \mathcal{O}^*$ に従属してゐる. 余随伴軌道 $G \cdot \omega$ は開集合 (実際 $\eta = (-1, \dots, -1) \in \mathcal{K}$ に対応する \mathcal{O}_η がある) であるから, f は $\mathcal{O}_\mathbb{C} \times \mathcal{O}_\mathbb{C}$ 上の交代双一次形式 $x, y \mapsto \omega([x, y])$ に関する Lagrangian (= maximal totally isotropic) subspace である. しかし, $f + \bar{f} = \mathcal{O}(0)_\mathbb{C} + \mathcal{O}(\frac{1}{2})_\mathbb{C}$ は $\mathcal{O}_\mathbb{C}$ の部分代数ではない. 従つて, f は polarization ではなく, weak polarization ではない (cf. Ozeki-Wakimoto [5]. 本稿で使う用語 polarization は [5, Def. 2.1] では admissible ω -polarization となつてゐる). この weak polarization f を用いて, Rossi et Vergne [8] では $T|_{L_{CR}^2(N)}$ が定式化されてゐる.

従つて, 問題は定理 2 でもれてゐる表現を如何にして拾ひあげるかである. $L_{CR}^2(N)$ は, いわゆる自乗可積分な CR 函数の空間であるから, 次に自乗可積分な $\bar{\omega}$ のホモロジ-空間を考へるのが自然であろう.

§2. $M \in C^\infty$ 多様体とする. Greenfield [2] に従つて CR 多様体と定義する. 複素化した接バンドル $T(M)_\mathbb{C}$ の subbundle $T^{1,0}$ についての (i), (ii) を満たすもの M 上の CR 構造としよう.

- (i) $T^{1,0} \cap T^{0,1} = \{0\}$ (zero section), ただし, $T^{0,1} = \overline{T^{1,0}}$.
- (ii) $T^{1,0}$ は involutive, i.e., α, β が $T^{1,0}$ の smooth sections

のとき, その bracket $[\alpha, \beta]$ も T^{10} の section
 として, 対 (M, T^{10}) を CR 多様体としよう. 以下, M 上には
 Riemann 構造があつて, CR 構造と compatible に $T(M)_{\mathbb{C}} \wedge$
 Hermitian に拡張されたものであるものとする, i.e., $T^{10} \perp T^{01}$ か
 つ conjugation $-$ は $T_x(M)_{\mathbb{C}}$ ($\forall x \in M$) を isometry とする.
 $E = (T^{10} \oplus T^{01})^{\perp} \subset T(M)_{\mathbb{C}}$ とおき, Λ^{10} (resp. Λ^{01}) を T^{01}
 $\oplus E$ (resp. $T^{10} \oplus E$) の $T^*(M)_{\mathbb{C}}$ における annihilator とする.

$$\Lambda^{p,q} = \underbrace{\Lambda^{10} \wedge \cdots \wedge \Lambda^{10}}_p \wedge \underbrace{\Lambda^{01} \wedge \cdots \wedge \Lambda^{01}}_q \subset \Lambda^{p+q}(T^*(M)_{\mathbb{C}})$$

とおき, $\pi_{p,q}$ を直交射影 $\Lambda^{p+q}(T^*(M)_{\mathbb{C}}) \rightarrow \Lambda^{p,q}$ とする. $\Pi(\Lambda^{p,q})$
 を $\Lambda^{p,q}$ の C^0 sections 全体を表すとき, $\bar{\partial}_b: \Pi(\Lambda^{p,q}) \rightarrow \Pi(\Lambda^{p,q+1})$
 を $\bar{\partial}_b = \pi_{p,q+1} \circ d$ (d は外微分) と定義する. T^{10} が involutive
 であるから $\bar{\partial}_b \circ \bar{\partial}_b = 0$ となる.

さて我々の situation にもどらう. $\lambda = \sum_{i=1}^k u_i \in \mathcal{O}(1)$ を定
 理 1 (iv) の如くとし, $\Omega = G(0) \cdot \lambda$ とおくと Ω は $\mathcal{O}(1)$ における
 regular open convex cone である (Rossi and Vergne [7, Th. 4.
 15]). として (4) と定義された Q は Ω -positive になるから,
 data Ω, Q から第 2 種 Siegel 領域 $D = D(\Omega, Q)$ が構成
 される:

$$D = \{ (w, v) \in \mathcal{O}(1)_{\mathbb{C}} \times (V, j); \operatorname{Im} w - Q(v, v) \in \Omega \}$$

さて, D の Šilov 境界を $S(D)$ とすると, よく知られてゐる

様に

$$S(D) = \{(w, v) \in \mathcal{O}(1)_{\mathbb{C}} \times V; \operatorname{Im} w - Q(v, v) = 0\}$$

となる。 $S(D)$ は $\mathcal{O}(1)_{\mathbb{C}} \times (V, j)$ の実部分多様体であるから、自然に $\mathbb{C}R$ 構造が入る： $\mathcal{T}(\mathcal{O}(1)_{\mathbb{C}} \times (V, j))$ を $\mathcal{O}(1)_{\mathbb{C}} \times (V, j)$ 上の正則接バンドルとすると、

$$T^{10}(S(D)) = T(S(D))_{\mathbb{C}} \cap \mathcal{T}(\mathcal{O}(1)_{\mathbb{C}} \times (V, j))|_{S(D)}$$

で $S(D)$ に $\mathbb{C}R$ 構造が入る。

一方、§1 で導入したベキ零リ一群 $N = \exp(\mathcal{O}(1/2) + \mathcal{O}(1))$ の各元を $n(a, c)$ ($a \in \mathcal{O}(1)$, $c \in \mathcal{O}(1/2) = V$) で表すと、sesqui-linear map Q の定義と Campbell-Hausdorff の公式から、 N の群演算は次の様に記述される：

$$(6) \quad n(a, c)n(a', c') = n(a + a' + 2A(c, c'), c + c')$$

$$T = E^{\mathbb{L}}, \quad A(c, c') = \operatorname{Im} Q(c, c').$$

N は $\mathcal{O}(1)_{\mathbb{C}} \times (V, j)$ に

$$n(a, c) \cdot (w, v) = (w + a + 2iQ(v, c) + iQ(c, c), v + c)$$

で働く。そして明らかに

$$\gamma: N \ni n(a, c) \mapsto n(a, c) \cdot (0, 0) = (a + iQ(c, c), c) \in S(D)$$

は上への微分同型である。さて N にも $T^{10}(N) = N \times V^+$ によって左不変な $\mathbb{C}R$ 構造が入る。

補題1. $\gamma: N \rightarrow S(D)$ は $\mathbb{C}R$ 同型。

§1で導入した \mathcal{H} 上の内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle$ を \mathbb{R} 上に制限したものと再び $\langle \cdot, \cdot \rangle$ を表す. この内積に関して, $\pi = V \oplus \mathcal{H}(1)$ は直交分解である. $\exists |V|$ は $\langle \cdot, \cdot \rangle$ に関して V 上の直交変換であるから, V^+ と V^- は, $\langle \cdot, \cdot \rangle$ を拡張した $V_{\mathbb{C}}$ のエルミート内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle_{\mathbb{C}}$ を直交させている. $V^+ \oplus \mathcal{H}(1)_{\mathbb{C}}$ の $\pi_{\mathbb{C}}^*$ における annihilator は自然に $(V^-)^*$ と同一視されるから, $\Lambda^0 1$ は $N \times (V^-)^*$ とみなされ, $(V^-)^*$ と V^+ には \mathbb{C} -linear dualityがあるから, $\Gamma(\Lambda^0 1)$ を N 上の V^+ 値 C^∞ 函数^(の空間)と同一視できる. 従って $\Gamma(\Lambda^0 \mathfrak{g})$ は N 上の $\Lambda^0 V^+$ 値 C^∞ 函数の空間とみることが出来る. V^+ の基底 $(Z_k)_{k=1}^n$ と $(\bar{Z}_k + \bar{Z}_k)_{k=1}^n$ が (V, j) で内積 (\cdot, \cdot) (0)を定義されたものの (V, j) への制限)に関して正規直交基底となるものの全体を $\mathcal{B}(V^+)$ を表す. さて, $(Z_k)_{k=1}^n \in \mathcal{B}(V^+)$ をとって, $\varphi, \psi \in \Gamma_c(\Lambda^0 \mathfrak{g})$ (compact support of sections) と
 $\varphi = \sum_J' \varphi_J \otimes Z_J$ ($E \in \mathbb{L}$ $Z_J = Z_{j_1} \wedge \dots \wedge Z_{j_g}$ for $J = (j_1, \dots, j_g)$
 \sum_J' は $1 \leq j_1 < \dots < j_g \leq n$ なる $J = (j_1, \dots, j_g) \in \mathbb{Z}^g$ について
の和), $\psi = \sum_J' \psi_J \otimes Z_J$ と表すとき,

$$(\varphi, \psi)_{\mathfrak{g}} = \frac{1}{2^g} \sum_J' \int_N \varphi_J(n) \overline{\psi_J(n)} dn$$

を $\Gamma_c(\Lambda^0 \mathfrak{g})$ に pre-Hilbert space structure を与える. 勿論この定義は $(Z_k)_{k=1}^n \in \mathcal{B}(V^+)$ のとりに依る. $\mathcal{J}_b \in \bar{\mathfrak{g}}_b$ の formal adjoint i.e. $(\bar{\mathcal{J}}_b \varphi, \psi)_{\mathfrak{g}+1} = (\varphi, \mathcal{J}_b \psi)_{\mathfrak{g}}$ とし,

$$\square_b = \mathcal{J}_b \bar{\partial}_b + \bar{\partial}_b \mathcal{J}_b \text{ とする.}$$

補題 2. $\varphi \in \Gamma(\Lambda^q \mathbb{R}^n)$, $\varphi = \sum_J \varphi_J \otimes Z_J$ のとき,

$$\square_b \varphi = -2 \sum_J \left(\sum_{m \notin J} Z_m \bar{Z}_m + \sum_{m \in J} \bar{Z}_m Z_m \right) \varphi_J \otimes Z_J$$

$$+ 2 \sum_J \sum_{k=1}^q (-1)^{k-1} \sum_{m \notin J} [Z_{j_k}, \bar{Z}_m] \varphi_J \otimes Z_m \wedge Z_{j_1} \wedge \cdots \wedge \hat{Z}_{j_k} \wedge \cdots \wedge Z_{j_q}$$

ただし, $m \notin J = (j_1, \dots, j_q)$ (resp. $m \in J$) とは, $\forall k$ に対し, $m \neq j_k$ (resp. ある k に対し $m = j_k$) を示し, \hat{Z}_{j_k} は Z_{j_k} という項がないことを示すものとする.

さて, 定義域 $\in \Gamma_c(\Lambda^q \mathbb{R}^n)$ とする $\bar{\partial}_b, \mathcal{J}_b, \square_b \in \mathcal{L}(\mathcal{H}_b^q)$, $(\mathcal{J}_b)_0^q, (\square_b)_0^q$ とし, $\bar{\partial}_b^q, \mathcal{J}_b^q, \square_b^q \in \mathcal{L}(\mathcal{H}_b^q)$ 作用素 $(\bar{\partial}_b)_0^q, (\mathcal{J}_b)_0^q, (\square_b)_0^q$ の閉包とする. このとき, 簡単な議論で,

$$\text{Range } \bar{\partial}_b^{q-1} \subset \text{Dom } \bar{\partial}_b^q \cap \text{Ker } \bar{\partial}_b^q$$

i.e., $\bar{\partial}_b^q \circ \bar{\partial}_b^{q-1} = 0$ が示される.

$$H^q = \text{Ker } \bar{\partial}_b^q \ominus (\text{Range } \bar{\partial}_b^{q-1} \text{ の閉包})$$

とおき, H^q ($q=0, 1, \dots, n$) \in 自乗可積 $\bar{\partial}_b$ コホモロジー空間と呼ぶ.

補題 3. $H^q = \{ \varphi \in \text{Dom } \square_b^q : \square_b^q \varphi = 0 \}$ i.e. $H^q = \text{Ker } \square_b^q$.

§3. バネ零リ-群 N 上の Fourier 変換について述べよう. $A = \text{Im } Q$ は $V \times V$ から $\mathfrak{g}(1)$ への交代双一次写像で, $Q(x, y) = A(jx, y) + iA(x, y)$ である. Ξ を (5) で定義された集合とすると, 容易に

$\lambda \in \Xi \iff$ 交代双一次形式 $\lambda \circ A$ が非退化.

がわかる. 従って, $\lambda \in \Xi \hookrightarrow \mathfrak{r}^*$ の余随伴軌道は $\lambda + \mathfrak{g}(1/2)^*$ となる. ρ_λ を余随伴軌道 $\lambda + \mathfrak{g}(1/2)^*$ に対応する N の既約ユニタリ表現 (同値類ではなく一つの表現) とする. $\lambda(A(x, y)) = \langle A_\lambda x, y \rangle$ で $V = \mathfrak{g}(1/2)$ 上の歪対称作用素 A_λ と定め, $\text{Pf}(\lambda \circ A) = (\det A_\lambda)^{1/2}$ とおく. N は単連結バネ零リ-群であるから, 作用素 $\rho_\lambda(f) = \int_N f(n) \rho_\lambda(n)^{-1} dn$ ($f \in C_c^\infty(N)$) は trace class になる.

Kirillov character formula. $\lambda \in \Xi, f \in C_c^\infty(N)$ のとき,

$$\text{Tr}(\rho_\lambda(f)) = \left(\frac{\pi}{2}\right)^n \text{Pf}(\lambda \circ A)^{-1} \int_{\mathfrak{g}(1)} f(n(a, 0)) e^{-i\lambda(a)} da$$

$F \in \mathbb{R}, n = \dim_{\mathbb{C}}(V, j)$.

この指標公式と, Ξ が $\mathfrak{g}(1)^*$ で dense であることから, 次の反転公式を得る.

Inversion formula. $\mathcal{O}(1)^*$ 上の Lebesgue 測度を適当に正規化すると, $f \in C_c^\infty(N)$ に対して

$$f(e) = \int_{\Xi} [T_\lambda f] Pf(\lambda \circ A) d\lambda$$

このより表現論の一般論を援用すると, 可測な既約 $\mathbb{Z} = \mathbb{Z}$ リ表現の族 $\{(T_\lambda, \mathfrak{H}_\lambda)\}_{\lambda \in \Xi}$ が存在して

$$(7) \quad L^2(N) \cong \int_{\Xi}^{\oplus} \mathfrak{H}_\lambda \otimes \mathfrak{H}_\lambda^\dagger Pf(\lambda \circ A) d\lambda \cong \int_{\Xi}^{\oplus} B_2(\mathfrak{H}_\lambda) Pf(\lambda \circ A) d\lambda$$

となることがわかる。ただし, $\mathfrak{H}_\lambda^\dagger$ は \mathfrak{H}_λ に共役同型な Hilbert 空間, $B_2(\mathfrak{H}_\lambda)$ は Hilbert 空間 \mathfrak{H}_λ 上の Hilbert-Schmidt 作用素の全体がなす Hilbert 空間を表す。

ここで定義された H^0 入語ともどそう。 N の CR 構造は左不変であるから, 左移動で H^0 上への N の $\mathbb{Z} = \mathbb{Z}$ リ表現 L_g が定義できる。

定理 3 (Rossi and Vergne [9, Th. 4.5]).

$$\sum_{g=0}^n L_g \cong \int_{\Xi}^{\oplus} T_\lambda Pf(\lambda \circ A) d\lambda.$$

§4. 我々はまず, 定理 3 と分解 (7) の関係と, 具体的に実現された N の既約 $\mathbb{Z} = \mathbb{Z}$ リ表現を通して明らかにすることから始

めよう. (V, j) 上のエルミート内積 (\cdot, \cdot) に関する自己共役作用素 $H_\lambda \in \mathfrak{g}$ $\lambda(Q(x, y)) = (H_\lambda x, y)$ を定義し, (V, j) 上の複素線型作用素 $j_\lambda \in \mathfrak{g}$ $j_\lambda = -i|H_\lambda|^{-1} H_\lambda$ ($\lambda \in \mathfrak{h}$) を定義する. ただし, $|H_\lambda| = (H_\lambda^2)^{1/2}$. そうすると, V 上の実線型作用素とみれば, j_λ は j と可換な複素構造であり, $\lambda \in \mathfrak{h}_n$ のとき, $j_\lambda = j$, $\lambda \in \mathfrak{h}_0$ のとき $j_\lambda = -j$ である. そして, 内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle$ に関して j_λ は直交変換になっている. 以下 j_λ は V 上の実線型作用素とし, $V_{\mathbb{C}}$ 上の複素線型作用素に自然に拡張しておく. $V_{\mathbb{C}}(j_\lambda; -\sqrt{-1})$ を $V_{\mathbb{C}}$ の j_λ の固有値 $-\sqrt{-1}$ に対応する固有空間を表すことにし

$$\mathfrak{g}_\lambda = \mathfrak{g}(1)_{\mathbb{C}} + V_{\mathbb{C}}(j_\lambda; -\sqrt{-1})$$

とおく. このとき, \mathfrak{g}_λ は $\lambda \in \mathfrak{h} \hookrightarrow \mathbb{R}^*$ における totally complex な positive polarization となる. この \mathfrak{g}_λ を用いて N の holomorphically induced representation π_λ を構成しよう. $X_\lambda \in \mathfrak{g}(1)$ のユニタリ指標 $\chi_\lambda(n(a, 0)) = e^{i\lambda(a)}$ なるものとする. π_λ の表現空間 \mathfrak{g}_λ は次の (i), (ii) を満たす $f \in C^\infty(N)$ のなる空間の完備化 ((ii) の積分から定義されるノルムについて) である:

$$(i) \quad Yf = -i\lambda(Y)f \quad \forall Y \in \mathfrak{g}_\lambda \quad (\text{左不変微分作用素とみれば})$$

$$(ii) \quad \int_{N/G(1)} |f(n)|^2 d\bar{n} < +\infty$$

($d\bar{n}$ は $N/G(1)$ 上の N -不変測度)

そして各表現作用素 $\pi_\lambda(\eta)$ は左移動を与えられる。通常の誘導表現 $\text{Ind}_{G(1)}^N \chi_\lambda$ の空間を $L^2(N; \lambda)$ とすると, \mathcal{H}_λ は $L^2(N; \lambda)$ の閉部分空間であることを注意しておく。一方,

$$Q_\lambda(z, w) = \lambda(A(\eta_\lambda z, w)) + i\lambda(A(z, w))$$

とおくと, Q_λ は $(V, \eta_\lambda) \times (V, \eta_\lambda)$ 上の負定値 hermitian sesqui-linear form である。一般に $\lambda \circ Q \neq Q_\lambda$ であることを注意。 (V, η_λ) 上の正則函数 F は

$$\|F\|_\lambda^2 = \int_V |F(v)|^2 \exp 2Q_\lambda(v, v) dv < +\infty$$

をみたすものの全体のなす Hilbert 空間を $\mathcal{F}_\lambda(V)$ と表す。 Q_λ は負定値であるから, $\mathcal{F}_\lambda(V) \neq \{0\}$ である。そして次を与える対応 $\mathcal{H}_\lambda \cap C^\infty(N) \ni f \mapsto F \in \mathcal{F}_\lambda(V)$

$$F(v) = f(\eta(v, v)) \exp -Q_\lambda(v, v)$$

は, ($d\eta$ を適当に正規化することにより) Hilbert 空間 \mathcal{H}_λ と $\mathcal{F}_\lambda(V)$ との同型に拡張される。そして, π_λ は次の $\mathcal{U} = \mathcal{U}_\lambda$ 表現 U_λ に変換される。

$$(8) \quad U_\lambda(\eta(a, b)) F(v) = \exp(i\lambda(a) + Q_\lambda(b, b) - 2Q_\lambda(v, b)) \cdot F(v-b)$$

$(U_\lambda, \mathcal{F}_\lambda(V))$ は余随伴軌道 $\lambda + \mathcal{U}(\frac{1}{2})^* \subset \mathcal{U}^*$ に対応する N の既約 $\mathcal{U} = \mathcal{U}_\lambda$ 表現である。

かくして N の既約 $\mathcal{U} = \mathcal{U}_\lambda$ 表現の族 $(U_\lambda, \mathcal{F}_\lambda(V))_{\lambda \in \mathcal{E}}$ を得るが, この族を "重ね合わせ" することができ, i.e., Hilbert

空間の場合 $\Xi \ni \lambda \mapsto \mathcal{F}_\lambda(V)$ が直積分可能であることを簡単に述べておく. 今, ベクトル場 $\Xi \ni \lambda \mapsto F_\lambda \in \mathcal{F}_\lambda(V)$ が可測 (可測性* の Lebesgue 測度に関して) であるとは, 任意の $v \in V$ に対し, 函数 $\lambda \mapsto F_\lambda(v)$ が可測であるときと定義する (各 F_λ は $\mathcal{F}_\lambda(V)$ の元, 従って一点 $v \in V$ での値 $F_\lambda(v)$ が意味を持つことに注意). この様に定義された可測なベクトル場 $\Xi \ni \lambda \mapsto F_\lambda \in \mathcal{F}_\lambda(V)$ の全体を Γ とおくと, Γ は複素ベクトル空間であり, Dixmier [1, p.164] の Definition 1 (i) ~ (iii) とみたすことが示される ($K_\lambda(z, w) = (\frac{2}{\pi})^n \text{Pf}(\lambda \circ A) \exp -2Q_\lambda(z, w)$ が $\mathcal{F}_\lambda(V)$ の再生核であることをフルに使う). 従って

$$\begin{aligned} \text{定理 4. } L^2(N) &\cong \int_{\Xi}^{\oplus} \mathcal{F}_\lambda(V) \otimes \mathcal{F}_\lambda(V)^\dagger \text{Pf}(\lambda \circ A) d\lambda \\ &\cong \int_{\Xi}^{\oplus} B_2(\mathcal{F}_\lambda(V)) \text{Pf}(\lambda \circ A) d\lambda \end{aligned}$$

注意. ここに構成した既約ユニタリ表現の族 $(U_\lambda, \mathcal{F}_\lambda(V))_{\lambda \in \Xi}$ は, Ogden-Vagi [4] に構成されているものと, holomorphic induction の手続きを以て整理したものである.

さて, $V_+^0(\lambda) = \wedge^0 V^+$ ($\forall \lambda \in \Xi$) とおくと, $\lambda \mapsto V_+^0(\lambda)$ は constant な Hilbert 空間の場合がある. Dixmier [1, Prop. 11, p.174] より次の系を得る.

$$\begin{aligned} \text{系. } L^2(N) \otimes \wedge^q V^+ &\cong \int_{\Xi}^{\oplus} \mathcal{F}_{\lambda}(V) \otimes \mathcal{F}_{\lambda}(V)^{\dagger} \otimes V_{+}^q(\lambda) \text{Pf}(\lambda \circ A) d\lambda \\ &\cong \int_{\Xi}^{\oplus} B_2(\mathcal{F}_{\lambda}(V)) \otimes V_{+}^q(\lambda) \text{Pf}(\lambda \circ A) d\lambda \end{aligned}$$

系の同型に従って, $L^2(N) \otimes \wedge^q V^+$ の閉部分空間である H^q_{Ξ} を特徴付けよう. V 上の複素構造 j_{λ} は j と可換であるから, j_{λ} は V^+ に不変にする. $V^+(j_{\lambda}; \sqrt{-1})$ を V^+ における j_{λ} の固有値 $\sqrt{-1}$ に対応する固有空間とし, $p(\lambda) = \dim_{\mathbb{C}} V^+(j_{\lambda}; \sqrt{-1})$ とおく. $\lambda \mapsto p(\lambda)$ は Ξ 上 locally constant である. 実際 $\lambda \in \Xi_q$ のとき, $p(\lambda) = q$ である. $\mathcal{Z}(\lambda) = \wedge^{p(\lambda)} V^+(j_{\lambda}; \sqrt{-1})$ とおく. 明らかに $\dim_{\mathbb{C}} \mathcal{Z}(\lambda) = 1$ で $\lambda \in \Xi_q$ のとき, $\mathcal{Z}(\lambda) = \wedge^q V^+(j_{\lambda}; \sqrt{-1}) \subset V_{+}^q(\lambda)$ となる. 従って $(\lambda \mapsto j_{\lambda})$ は連続 (piecewise) かつ $\lambda \mapsto \mathcal{Z}(\lambda)$ は 1次元 Hilbert 空間の連続 (piecewise) な場である.

一方, 任意の $\lambda \in \Xi$ に対して, V 上の恒等的に 1 なる函数 $\mathbb{1}$ は $\mathcal{F}_{\lambda}(V)$ に属する. $B_2(\mathcal{F}_{\lambda}(V))$ に属する作用素 T で値域 $\text{Range } T$ が 1次元部分空間 $\mathbb{C}\mathbb{1}$ に含まれるものの全体を $A(\mathcal{F}_{\lambda}(V))$ とする. 明らかに $A(\mathcal{F}_{\lambda}(V))$ は $B_2(\mathcal{F}_{\lambda}(V))$ の閉部分空間で, $A(\mathcal{F}_{\lambda}(V))$ 自身 Hilbert 空間である.

定理 5. $H^{\mathfrak{g}} \cong \int_{\Xi_{\mathfrak{g}}}^{\oplus} A(\mathcal{F}_{\lambda}(V)) \otimes \mathfrak{z}(\lambda) \text{Pf}(\lambda \circ A) d\lambda$

$$\cong \int_{\Xi_{\mathfrak{g}}}^{\oplus} \mathcal{F}_{\lambda}(V)^{\dagger} \text{Pf}(\lambda \circ A) d\lambda$$

$$\cong \int_{\Xi_{n-\mathfrak{g}}}^{\oplus} \mathcal{F}_{\lambda}(V) \text{Pf}(\lambda \circ A) d\lambda$$

注意. (i) 写像 $A(\mathcal{F}_{\lambda}(V)) \ni T \mapsto T^* \left(\frac{1}{\|1\|_{\lambda}} \right) \in \mathcal{F}_{\lambda}(V)^{\dagger}$ が $A(\mathcal{F}_{\lambda}(V))$ と $\mathcal{F}_{\lambda}(V)^{\dagger}$ との Hilbert 空間としての同型を与える。

(ii) $\mathcal{F}_{\lambda}(V)^{\dagger} \cong \mathcal{F}_{-\lambda}(V)$ は $j_{-\lambda} = -j_{\lambda}$ から容易に導かれる。

系 (Rossi and Vergne [9]). $H^{\mathfrak{g}} = \{0\} \Leftrightarrow \Xi_{\mathfrak{g}} = \emptyset$

§5. さて $H^{\mathfrak{g}}$ を unitary G -module にすることを考えよう。まず最初に次の事に注意する。 $G = N \rtimes G(0)$ と半直積に表されるから $G/G(0)$ は reductive coset space である。よく知られている様に " $G/G(0)$ 上に G 不変な Riemann 計量が存在する $\Leftrightarrow \mathfrak{n} = \text{Lie } N$ 上に $\text{Ad}_G G(0)$ 不変な正定値内積が存在する" であるから、我々の場合 $G/G(0)$ 上には G 不変な Riemann 計量が存在しない。従って、通常の手続きでコホモロジー空間 $H^{\mathfrak{g}}$ 上に G の \mathfrak{U} -タリ表現は定義できない。ところが、定理 5 により、 $H^{\mathfrak{g}} \cong \int_{\Xi_{n-\mathfrak{g}}}^{\oplus} \mathcal{F}_{\lambda}(V) \text{Pf}(\lambda \circ A) d\lambda$ であり、 $\Xi_{n-\mathfrak{g}}$ は $G(0)$ space であるから、各 fiber $\mathcal{F}_{\lambda}(V)$ を $\mathcal{F}_{\mathfrak{g}, \lambda}(V)$ に写す \mathfrak{U} -タ

り変換が見つければ $G = N \rtimes G(0)$ のユニタリ表現を定義することができる。しかし、 j_λ と $\text{Ad}_V g_0$ ($g_0 \in G(0)$) の関係が簡単でないのび、求める変換 $j_\lambda(V) \rightarrow j_{g_0 \cdot \lambda}(V)$ を直接見出すのは難しい(結果としては見つかる)。そこで N の既約ユニタリ表現の別の実現を作ることから再出発する。

§6. 各 $\eta \in \mathcal{E} = \{-1, 1\}^2$ に対し、 $\lambda_\eta \in \mathfrak{g}(1)^*$ を命題1で定義されたものとする。 j_{λ_η} と λ_η に対して §4 の冒頭の様にして作られる V 上の複素構造とし、 V 上の作用素 $j_{g, \eta}$ と

$$j_{g, \eta} = (\text{Ad}_V g) \circ j_{\lambda_\eta} \circ (\text{Ad}_V g)^{-1} \quad (g \in G(0))$$

で定義する。 $\text{Ad}_V g$ と j は可換であるから、 $j_{g, \eta}$ は j と可換な V 上の複素構造である。ただし、 V 上の内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle$ に関して、一般には、 $j_{g, \eta}$ は直交変換ではない。その代り、次の有用な関係式が成り立つ。

$$(9) \quad (\text{Ad}_V g_1) \circ j_{g_2, \eta} = j_{g_1 g_2, \eta} \circ (\text{Ad}_V g_1) \quad (\forall g_1, g_2 \in G(0), \eta \in \mathcal{E}).$$

以下 §4 と全く同じ方法で N の既約ユニタリ表現を構成する:

$$\sigma_{g, \eta} = \mathfrak{g}(1)_{\mathbb{C}} \oplus V_{\mathbb{C}}(j_{g, \eta}; -\sqrt{-1})$$

は $g \cdot \lambda_\eta$ における totally complex positive polarization である。この $\sigma_{g, \eta}$ を用いて構成される holomorphically induced representation を $(\pi_{g, \eta}, \mathcal{H}_{g, \eta})$ とすると、 $\mathcal{H}_{g, \eta}$ は $L^2(N; \lambda)$ ($\lambda = g \cdot \lambda_\eta$) の閉部分空間である(このことは §7 で

π_λ と $\pi_{g,\eta}$ ($\lambda = g \cdot \lambda_\eta$) との間の intertwining operator の構成に
おいて用いる). 一方

$$Q_{g,\eta}(z, w) = \lambda(A(j_{g,\eta} z, w)) + i\lambda(A(z, w)) \quad (\lambda = g \cdot \lambda_\eta)$$

とおくと, $Q_{g,\eta}$ は $(V, j_{g,\eta}) \times (V, j_{g,\eta})$ 上の負定値 hermitian
sesqui-linear form である. $(V, j_{g,\eta})$ 上の holomorphic
functions F は

$$\|F\|_{g,\eta}^2 = \int_V |F(v)|^2 \exp 2Q_{g,\eta}(v, v) dv < +\infty$$

をみたすものの全体のなす Hilbert 空間を $\mathcal{F}_{g,\eta}(V)$ と表す.

$\mathcal{F}_{g,\eta}(V)$ 上に N の既約 $\mathbb{Z} = \mathbb{Z}$ リ表現 $U_{g,\eta}$ が次の様に実現さ
れる.

$$(10) \quad U_{g,\eta}(n(a, b))F(v) = \exp(i g \cdot \lambda_\eta(a) + Q_{g,\eta}(b, b) - 2Q_{g,\eta}(v, b)) \cdot F(v-b)$$

このとき, $G(10)$ の左 Haar 測度と有限集合 $\mathcal{X} = \{-1, 1\}^{\mathbb{Z}}$ 上の
counting measure に関して, Hilbert 空間の場 $G(10) \times \mathcal{X}$
 $\ni (g, \eta) \mapsto \mathcal{F}_{g,\eta}(V)$ が直積分解可能と云うことも, §4 の $\mathcal{F}_\lambda(V)$
の場合と同様に示される.

$G(10)$ が完全可解で, $\dim \mathcal{O}(10) = \dim \mathcal{O}(11)$ なることから,
 $\mathcal{O}(11)^*$ での各開 $G(10)$ 軌道 \mathcal{O}_η ($\eta \in \mathcal{X}$) と $G(10)$ は微分同型で
あることに注意しておく. model $(U_{g,\eta}, \mathcal{F}_{g,\eta}(V))_{g \in G(10), \eta \in \mathcal{X}}$
を用いた $L^2(N)$ の分解は次の通りである.

定理 6. $L^2(N) \cong \sum_{\eta \in \mathfrak{X}} \int_{G(0)}^{\oplus} B_2(\mathcal{F}_{g,\eta}(V)) \delta(g) dg$
 ただし, $\delta(g) = (\det_n \text{Ad} g)^{-1}$ ($g \in G(0)$) 是 dg は $G(0)$ の左
 Haar 測度.

注意. $\mathcal{F}_{g,\eta}$ が一般には V 上の内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle$ に関して直交変換
 ではなくなる故, $\text{model}(U_{g,\eta}, \mathcal{F}_{g,\eta}(V))_{g \in G(0), \eta \in \mathfrak{X}}$ を用いてコ
 ホモロジー空間 H^0 を直接解析することは困難である.

各 $g_0 \in G(0)$ と V 上の函数 F に対して

$$R(g_0)F(v) = (\det_v \text{Ad} g_0)^{-1/2} F((\text{Ad} g_0)^{-1}v)$$

とおく. 関係式(9)を用いて次の補題を示される.

補題 4. (i) 任意の $g, g_0 \in G(0)$ と $\eta \in \mathfrak{X}$ に対して $R(g_0)$ は
 $\mathcal{F}_{g,\eta}(V)$ から $\mathcal{F}_{g_0g,\eta}(V)$ の上への \mathcal{U} -タリな写像である.

$$(ii) R(g_0)U_{g,\eta}(n(g_0^{-1} \cdot a, g_0^{-1} \cdot b)) = U_{g_0g,\eta}(n(a, b))R(g_0)$$

§7. この節ではつねに $\lambda = g \cdot \lambda_\eta$ ($g \in G(0), \eta \in \mathfrak{X}$) とおく.
 \mathcal{U} -タリ同値な N の 2 つの既約 \mathcal{U} -タリ表現 $(U_\lambda, \mathcal{F}_\lambda(V))$ と
 $(U_{g,\eta}, \mathcal{F}_{g,\eta}(V))$ との間 *intertwining operator* を構成しよう.
 これは丁度 *positive polarization* のとりかえ $\sigma_\lambda \rightarrow \sigma_{g,\eta}$ に対
 応する *intertwining operator* である (Mazur [3] 参照).

我々の場合, \mathfrak{g}_λ も $\mathfrak{g}_{g,\eta}$ も共に *totally complex* なので議論は単純明快である. まず \mathfrak{g}_λ 及び $\mathfrak{g}_{g,\eta}$ が通常の誘導表現 $\text{Ind}_{G(U)}^G \chi_\lambda$ の空間 $L^2(N; \lambda)$ の閉部分空間であったことを思い起こそう. このとき,

$$\mathfrak{g}_\lambda \xrightarrow{\text{injection}} L^2(N; \lambda) \xrightarrow{\text{直交射影}} \mathfrak{g}_{g,\eta}$$

を得られる作用素 $\mathfrak{g}_\lambda \rightarrow \mathfrak{g}_{g,\eta}$ が unitary intertwining operator と与えることは明らかである. これを $\mathcal{F}_\lambda(V)$ から $\mathcal{F}_{g,\eta}(V)$ への作用素として表すと次の様になる:

$$(II) \quad I_{g,\eta} F(v_0) = \int_V F(v) \exp[Q_\lambda(v, v) + Q_{g,\eta}(v, v) - 2Q_{g,\eta}(v_0, v)] dv$$

とおくと, 正の定数 $C_{g,\eta}$ が存在して, $C_{g,\eta} I_{g,\eta}$ は $\mathcal{F}_\lambda(V)$ から $\mathcal{F}_{g,\eta}(V)$ ^(の上)への \mathbb{C} -タリな写像 $U_{g,\eta}(n) = I_{g,\eta} U_\lambda(n) (I_{g,\eta})^{-1}$ ($\forall n \in N$) が成り立つ. 勿論この intertwining relation を直接確かめることも容易である ($\text{Im } Q_\lambda = \text{Im } Q_{g,\eta}$ に注意).

(II) の右辺が $\forall F \in \mathcal{F}_\lambda(V)$ に対して絶対収束していることも注意しておく. なお, この積分変換は, N が Heisenberg 群のとき ($\text{rank } \mathfrak{g} = 1$ のときがそうである) すでに Satake [10] に現れたものである.

注意. $\lambda \in \mathfrak{h}_n$ のとき, $\mathfrak{g}_\lambda = \mathfrak{g}_{g,\eta} = \mathfrak{g}$ であるから, 2つの model $(U_\lambda, \mathcal{F}_\lambda(V))$ と $(U_{g,\eta}, \mathcal{F}_{g,\eta}(V))$ は同一である. このときは, (II)

は、函数 $\exp -2Q_\lambda(z, w)$ の正の定数倍が再生核と云うことから、確かに恒等作用素の正の定数倍になつてゐる。

補題 5. $\psi_{g,\eta}(v) = \exp \frac{1}{2} (Q_\lambda(v, v) - Q_{g,\eta}(v, v) - i \operatorname{Re} Q_{g,\eta}(v, \lambda v))$ とおくと、 $\psi_{g,\eta} \in \mathcal{F}_{g,\eta}(V)$ であつて、 $I_{g,\eta} \mathbb{1} \in \mathbb{C} \psi_{g,\eta}$ 。

§8. $B_2(\mathcal{F}_{g,\eta}(V))$ に属する作用素 T の値域 $\operatorname{Range} T$ が一次元部分空間 $\mathbb{C} \psi_{g,\eta}$ に含まれるものの全体を $\mathcal{A}(\mathcal{F}_{g,\eta}(V))$ で表すと $\mathcal{A}(\mathcal{F}_{g,\eta}(V))$ は Hilbert 空間 $B_2(\mathcal{F}_{g,\eta}(V))$ の閉部分空間、従つて $\mathcal{A}(\mathcal{F}_{g,\eta}(V))$ 自身 Hilbert 空間である。さて、

$$\int_{\mathbb{R}}^{\oplus} B_2(\mathcal{F}_\lambda(V)) P_f(\lambda \circ A) d\lambda \ni F \mapsto \tilde{F} \in \sum_{\eta \in \mathcal{X}} \int_{G(0)}^{\oplus} B_2(\mathcal{F}_{g,\eta}(V)) \delta(g) dg$$

$$\tilde{F}_{g,\eta} = I_{g,\eta} F_{g,\lambda_\eta} (I_{g,\eta})^{-1}$$

は上への等長写像であり、次の Hilbert 空間としての同型を引き起こす。

$$\int_{0,\eta}^{\oplus} \mathcal{A}(\mathcal{F}_\lambda(V)) P_f(\lambda \circ A) d\lambda \cong \int_{G(0)}^{\oplus} \mathcal{A}(\mathcal{F}_{g,\eta}(V)) \delta(g) dg \quad (\forall \eta \in \mathcal{X})$$

$\mathcal{A}(\mathcal{F}_{g,\eta}(V)) \cong \mathcal{F}_{g,\eta}(V)^\dagger \cong \mathcal{F}_{g,-\eta}(V)$ であるから、定理 5, 6 と上の議論から次の定理を得る。

定理 7. $H^0 \cong \int_{G(0)}^{\oplus} \mathcal{F}_{g,-\eta}(V) \delta(g) dg$, $\exists \in \mathcal{L}$ Σ は $O_\eta \subset \mathcal{E}_g$ となる $g \in \mathcal{L}$ すべてに対する和.

定理 7 の右辺は補題 4 (i) によって容易に unitary G -module とすることが出来るから, H^0 に G のユニタリ表現 σ_g が定義できることになる. ここでは $\int_{G(0)}^{\oplus} \mathcal{A}(\mathcal{F}_{g,\eta}(V)) \delta(g) dg$ のユニタリ表現 π_η を書き下しておく. $e_{g,\eta} = \psi_{g,\eta} / \|\psi_{g,\eta}\|_{g,\eta}$ とし, 各 $x, y \in G(0)$ と $g \in \mathcal{L}$ に対して, 部分的等長写像 $P_{y,x}^g: \mathcal{F}_{x,\eta}(V) \rightarrow \mathcal{F}_{y,\eta}(V)$ を次のように定義する:

$$P_{y,x}^g = (\cdot, e_{x,\eta}) e_{y,\eta}$$

このとき, 容易に $P_{z,y}^g P_{y,x}^g = P_{z,x}^g$ が成り立つことがわかる.

よして π_η の表現作用素は

$$(12) \quad \pi_\eta(g) F(x) = \delta(g)^{-1/2} P_{x, g^{-1}x}^g F(g^{-1}x) \mathcal{R}(g^{-1}) \quad (g \in G(0))$$

$$\pi_\eta(n) F(x) = F(x) U_{x,\eta}(n)^{-1} \quad (n \in N)$$

$$(F \in \int_{G(0)}^{\oplus} \mathcal{A}(\mathcal{F}_{g,\eta}(V)) \delta(g) dg)$$

補題 6. $\rho: \mathcal{O}^*/G \rightarrow \hat{G}$ は Kirillov - Bernat 対応とすると, $\pi_\eta \cong \rho(\mathcal{O}_{-\eta})$

定理 8. $\sigma_g \cong \int \rho(\mathcal{O}_\eta)$, $\exists \in \mathcal{L}$ Σ は $O_\eta \subset \mathcal{E}_{n-g}$ となる $g \in \mathcal{L}$ すべてについての和で, $\mathcal{O}_\eta = \mathcal{O}(0)^* + \mathcal{O}(1/2)^* + O_\eta$ である.

注意. 定理 8 で $q=0$ のときが定理 2 である. $0_\eta \subset \mathfrak{E}_n$ となる様な $\eta \in \mathfrak{E}$ に対しては, $j_\lambda = j_{q,\eta} = j$ であるから, $\psi_{q,\eta} = 1$ であることに注意. 従ってその様な $\eta \in \mathfrak{E}$ に対しては, (12) の表示 $\pi_\eta(q)$ ($q \in G(0)$) において, $P_{x,q+x}^\eta$ の部分を $\mathfrak{R}(q)$ としてもよく, また恒等作用素におきかえてもよい. しかし, 一般の $\eta \in \mathfrak{E}$ に対しては, $\mathfrak{R}(q_0) \psi_{q,\eta} \in \mathbb{C} \psi_{q_0,\eta}$ であるからさういう訳にはいかない.

かくして, $\sum_{g=0}^n \sigma_g \cong \sum_{\eta \in \mathfrak{E}} \rho(\theta_\eta)$ とはり, G の Plancherel 公式に現れる G の既約ユニタリ表現が丁度一回ずつ全部並ぶ表現を部分群 N の CR 構造と関連付けて得ることができた.

なお ^(具体的な) L^2 -対応の形での G の Plancherel 公式については稿を改めて報告する予定である.

References

- [1] J. Dixmier, Von Neumann algebras, North-Holland, Amsterdam, 1981.
- [2] S.J. Greenfield, Cauchy-Riemann equations in several complex variables, Ann. Scuola Norm. Pisa, 22 (1968), 275-314.
- [3] B. Magneron, Spineurs symplectiques purs et indice de Maslov de plans lagrangiens positifs, J. Funct. Anal., 59 (1984), 90-122.
- [4] R.D. Ogden and S. Vagi, Harmonic analysis of a nilpotent group and function theory on Siegel domains of type II, Adv. Math., 33 (1979), 31-92.

- [5] H.Ozeki and M.Wakimoto, On polarizations of certain homogeneous spaces, Hiroshima Math. J., 2 (1972), 445-482.
- [6] I.I.Pyatetskii-Shapiro, Automorphic functions and the geometry of classical domains, Gordon and Breach, New York, 1969.
- [7] H.Rossi and M.Vergne, Representations of certain solvable Lie groups on Hilbert spaces of holomorphic functions and the applications to the holomorphic discrete series of a semisimple Lie group, J. Funct. Anal., 13 (1973), 324-389.
- [8] _____, Equations de Cauchy-Riemann tangentielles associées à un domaine de Siegel, Ann. Sci. Ec. Norm. Sup., 9 (1976), 31-80.
- [9] _____, Group representations on Hilbert spaces defined in terms of $\bar{\partial}_b$ -cohomology on the Silov boundary of a Siegel domain, Pacific J. Math., 65 (1976), 193-207.
- [10] I.Satake, Factors of automorphy and Fock representations, Adv. Math., 7 (1971), 83-110.